

進藤牧郎先生を囲む座談会：
「ドイツ近代成立史」とその周辺
(進藤牧郎教授退官記念号)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 進藤, 牧郎[他] メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23997

進藤牧郎先生を囲む座談会

『ドイツ近代成立史』とその周辺



〈出席者〉進藤牧郎（西洋経済史）
一発言者一 林 宥一（現代日本経済史）
藤田 暁男（経済原論）
山辺 知紀（経済学史）
水谷 良夫（現代経済理論）
〈司 会〉橋本 哲哉（日本経済史）

橋本哲哉 これから「進藤牧郎先生を囲む座談会」をおこないたいと思います。

進藤牧郎先生は1923年（大正12）のお生れですので、誠に残念ながら本年3月に金沢大学経済学部を定年退官されます。1948年東京大学文学部をご卒業の後、北海道大学助手を経て、先生は金沢大学には1951年に着任されました。その後40年近い年月を金沢で過ごされたわけですが、今日はそうした進藤先生の研究・教育、そして社会的活動などをふりかえっていただき、またわれわれもいろいろ質問などをしながら、先生の業績をしっかりとうけとめる機会にしたいと思っております。よろしくお願い致します。

進藤先生の長年の研究は、ひとつは『ドイツ近代成立史』（勁草書房 1968年刊）に集大成されています。まずそのご本の概要、あるいはそこで述べられたかったこと、あるいは述べられなかったこと、そのへんを簡単にご自身で整理していただければと思います。

進藤牧郎 『ドイツ近代成立史』を本にした

のは、僕自身の意図よりも、いろんな外圧の方が多かったわけですが、チェコに行く前、ちょうど1968年で、しかも「ブラハの春」の前に書いてしまっていたものですから、随分あちこち抜けている、あるいはまちがっている点も多いと思うんです。あれを公刊するまで20年間ぐらい、学部を卒業してからずっとオーストリアの啓蒙絶対主義とその農民解放をやってみようと思ったのは、やっぱり戦争から帰って戦後どんな近代的な社会にするかという、ある意味での実践的課題でもあったと思うんです。

ただ、どうしてオーストリアをやったかという、大変粗雑なことなんですけれども、プロイセンを中心にしたドイツ史はかなりあったわけですが、ハプスブルクという中世の後期以来大きな意味をもった皇帝家=王朝国家は、恐らくドイツ史の中でも、あるいは世界史の中でも重要な意味を持っていたと思います。同時に、その当時はそれほど意識しなかったんですけれども、多民族国家であると

いうことと、マリア・テレージアという女帝がああいう形で、しかもカトリックで、農民保護、農民解放を進め、そういう形でヨーゼフII世に引き継がれた。その時代のオーストリアの絶対主義というのは一体普通言われている再版農奴制あるいはグーツヘルシャフトとどう関係するのか。そういう意味で、卒業論文では結局君主、ランデスヘルといますけれども、ランデスヘルとグーツヘルとの対抗関係の中で、ランデスヘルが農民を保護することによって、封建的な身分制を担う貴族領主のグーツヘルシャフトを变质させていったというふうに最初にとらえたわけです。

しかし、北大へ行きますと、堀米庸三さんとか島山成人さんから、ウエーバーだとかマルクスだとかレーニンだとか、いろいろ教えられていく中で、当時国際的にもようやく封建的危機論争というのが出てきたわけです。いってみれば、どちらかというが大塚史学的だった僕なんですけれども、どうも、ことに東ヨーロッパ、いわゆる封建反動と言われていたプロイセンでは、大塚さん、あるいは特に高橋さんのように、単に裁判領主制、領主側の反動とだけは言い切れないものがあるんじゃないか。

そういう意味で、もう一度『資本論』などを読んでみますと、特にはっきりと書いてあるのは、地代の発生史を書いているところで、グーツベトリープというか、領主経営は過渡期に、封建地代としての貨幣形態をとった貨幣地代から近代的地代への過渡期の中で取り上げられているわけですね。農民的土地所有

だとかメタヤージュという分益農・折半小作だとか、それからグーツベトリープ、更には、アメリカの黒人奴隷制プランテーションまで入れているわけですね。

そういった中で、結局これはもしかすると単なる封建反動なんではなくて、資本主義発展の二つの道と言われているうち、上からの道のひとつの本源的蓄積の過程であったのではないか。そういうふうにして見ますと、何というか、確かに封建的地代範疇の展開の中で出てくる賦役＝労働地代から現物地代になって貨幣地代になる、そういう流れと全く逆行する形で現物経済、それから賦役と、プランテーションまでいけば奴隷労働まで戻っていく。

しかし、これは普通言われているように、東ヨーロッパに独自の資本主義を作り上げる本源的蓄積ではなくて、世界史的な意味でイギリスあるいはフランス、オランダあたりの資本主義的な発展に対応して、その市場へ向けて穀物なり、そういった形で第一次産品を商品として売っていく。ですから、現物地代といっても、地主にとっては商品として実現するような、そういう形であったわけですから、グーツヘルシャフトの場合も賦役を使って商品生産をやる。そういうふうになると、これはやはり過渡期としてとらえるならば、本来は貨幣地代という性格を与えるべきだ。しかし、その社会的条件の中で直接地主の手には現物の形、あるいは賦役の形、あるいは奴隷労働という形で、現実の歴史の中に現われてくるのではないか。基本的には、やはり

貨幣地代から近代的地代への過渡期と考えたわけです。

そうなると、マルクスも言っていますけれども、マニュファクチャー段階では特にそうでしょうけれども、封建地代、地代部分としてとらえるか、利潤部分としてとらえるかという場合には、プランテーションの場合には利潤としてとらえられているし、グーツヘルシャフトの場合には地代。地代と利潤の関係で、地代が優先しているような、それは封建的土地所有が遺っているためですけれども、そういうような段階であったんじゃないか。農村の中で、そうしますと特に東ドイツでは、封建的危機の段階ですすでに貨幣経済というのはかなり浸透しているわけですから、その市場で、大塚さんなんかが言うように、農民相互間の市場を単に局部的市場圏、最近ではそういうふうに言いだしているわけですが、そういう単なる商品の売買・交換だけではなくて、むしろ労働力が商品化する、あるいは労働者が雇用されるその端緒的な労働市場というものを領主が独占していったというふうにとらえた方がいいんじゃないか。

もちろん、それは農民層の分解の中からイギリスのように、あるいはオーストリアの一部、西ドイツなんかもそうですけれども、社会的分業という形の中で農民層が分解していくのではなくて、同じ商品を作っている中で、しかもなおかつ輸出向けの同じ商品を作っている中で、農民層だけが分解していく。その中から、非常に早い段階では傭兵も出てきますし、そういった浮浪者とか、そういう土地

を失った農民が出て来る。しかし、これは全国的に移動できないままに、グーツ制度の中に閉じ込められていった。その労働力の独占、封建反動なんでしょうけれども、その中でようやく成長しつつあった貨幣地代を領主自身が、また特に30年戦争以後の再建の過程で、土地が荒廃していたために、領主自身が生産、領主経営を営む。その中で、農民追放も進められていくわけです。イギリスの場合ですと、価格革命が農民の側に有利に展開したけれども、ドイツの場合には領主経営が自ら生産しているために、富農層と領主との間がいわば競争関係に入って、しかも農民層分解が徐々に進むと、領主・富農層と直接労働を提供する半賃金労働者の貧農層以下との対立が表面に出てきて、富農層がグーツヘルの権力機構の中に再編され、その共同体を通して、その共同体が権力の末端機構になってしまった。こういうふうに考えたらどうだろうと思ったわけです。

ですから、あるところでは領主経営というのは農業におけるマニュファクチャーだというような言い方もされているところもありますけれども、そういう意味で、一方では、だからこそ狭いけれどもグーツという形の領域の中では非常に小さいながらも市場があった。商品市場も、例えば醸造だとか、あるいは精粉だとか、そういう形で領主が地代取得部分を市場の中に商品・貨幣の形で投入して、その市場を投機的にも支配する。労働者に対しては優先雇用権といったようなものを使って、あるいはゲジンデ（下僕）強制という形

で上から強制的に縛りつけていったと、こういうふうにとった方がいいんじゃないかというのが、一つありました。ですから、封建反動というものの自体が、実は上からの本源的蓄積の一つの現われだということです。もしそうだとすれば、18世紀ぐらいから農村マニュファクチャー、これはヨーロッパ的な意味で、問屋制の支配下にあるようなマニュファクチャー、あるいは領主直営のマニュファクチャーというものも当然展開する条件があったというふうに考えられます。

特に、絶対王政のヨーゼフII世あたりまでの絶対王政が求めたものは、やはり比較的豊かな農民、自営農民を創出・維持していくという形の農民保護政策であり、農民解放だったと思うんですが、同時に、領主自身が、プロイセンとちょっと違うんですけども、オーストリア・ペーメンでは30年戦争の後にハプスブルク家によって土地を与えられた、どちらかというと不在地主的貴族が多かったわけですから、実質的には、領主経営そのものはグーツベアムトという、一種の管理人に中間的に搾取されていて、本来のグーツヘル自身はむしろ不在地主として、恐らく貨幣で地代部分を取っていく、そういう人になってしまった。

ところが、オーブリヒカイトというか、司直として直接農民に接するのは、やはりグーツ管理人で、この管理人も権限そのものはやはり一種の公権力の委任、あるいは君主権の委託を受けているという形であったため、絶対王政がそれを政策的に上から法律ですすめ

ていくのに対して、現実には抵抗できなかった。

従って、領主経営そのものを、従来の比較的大きな規模の農民の賦役に基づくグーツ経営ではなく、その農民保護政策の中で噴出してきた貧農層、あるいは土地を持たない人たちを、再び強制的に領主経営に縛り付けていった。領主経営の構造が変わっていった。

いわゆる農奴制における土地緊縛、農民に対する緊縛というのは、中世では農民と農民保有地との間の結び付きであったわけですね。それがグーツヘルシャフトになると、グーツ経営と農民とが結び付けられて、そこで緊縛されてしまっている。ちょっと意味が違うんじゃないかというふうにも思ったわけです。

ただ、最後に、展望の中で、ペーメンを扱ったために、ペーメンを扱ったのは実はマリア・テレージアの農民解放の対象になっているのが主としてスラブ系のチェコ人農民だったわけで、ほかの上部オーストリアだとか、そういうところではほとんどそういう関係は西ドイツのように多少現実には緩んでいたし、そういうことでチェコということになったわけです。

そうなってくると、民族問題がどうしても加わってくるわけですね。それで、フス戦争以来、ずっと古い15世紀のフス戦争以来民族問題はあるわけですが、これを社会経済史の中でどうやるとらえるかというのは、この段階では、今もそうですけれども、はっきり捕まえられなかったというのが正直なところだと思います。

そういう中で、時間切れもあって、文部省の刊行助成金ですか、それで無理して出したようなわけです。

橋本 どうもありがとうございました。なかなか格調高いお話しで、講義を伺っているような感じでしたけれども、それではこちらから先生のご本について1〜2切り込むような問題を出して、少し議論してみたいと思います。最初に林さん、お願いします

林 宥一 初めて『ドイツ近代成立史』を読ませていただきました。刊行は1968年で、ちょうど僕が大学へ入学したところです。何年も金沢大学にいながら今日までこの大著を読まずに過ごして来て恥ずかしく思います。印象的なことだけしか述べられませんが、感想を述べさせていただきます。読む前は、進藤先生は大塚史学の薫陶を受けた方だから、この本も、そのような人々の著作と同じようなトーンをもっているだろうと思いました。進藤先生自身も、「研究当初における私にとっては、戦後の解放感と相まって、いわゆる大塚史学に代表される『近代主義』が何といても心の支えであった。粗悪な紙に刷られた大塚久雄先生の諸研究を貪り読み、高橋幸一郎先生の著書を通して、また講義に列して近代的進化の法則を教示された」というようなことを書いていますけれども、そういう先入観をずっと僕は持っていたんです。

ところが、この本を読んでやや異なった印象を受けたということなんです。その理由を、考えてみますと、一つは今先生が言われたように、この本の対象地域がスラヴ的な地域で

あるということにかかわっていると思われま

す。戦争直後の歴史学の主流というのは、封建制から資本制への移行ということが主要なテーマで、その中でどういう形で近代市民社会が誕生してくるのかということであったと思います。

ドイツ近代史の場合も、その例外ではなくて、どういう形で統一的なドイツ近代社会が成立するに至ったかということであったろうと思われるわけです。そしてその場合に、中心地域はプロイセンでした。

ところが、先生の場合は一応ドイツ資本主義の成立過程を、ドイツそれ自体の発展の中でとらえ直すというふうに述べておりますけれども、取りあえず対象を主としてペーメンに、そしてあわせて隣接するザクセンを選ぶのが最も手近な道であると考え、そこを対象地域にすることによって研究を進められました。そこから、ちょっと違った問題が出てきているように思われます。

その点で非常に印象深かった点が2点あります。これは今進藤先生も言われたことと全く重なることなんですけれども、第1点は、先生のグーツヘルシャフトの評価です。僕などの機械的で断片的な知識によれば、エルベ以西のグルントヘルシャフトと対照的に東エルベに現われたグーツ経営というのは、再版農奴制の典型としてとらえられて、通説的な書き方では、生産物地代から労働地代への逆転がみられ、一いわゆる封建反動といわれているものですが、一そしてそれが、いわ

ゆる下からの自生的な資本主義発展の阻止条件となった要因として評価されてきたように思います。少なくとも僕の頭の中ではそういうふうになっているのですけれども、しかし、進藤先生の場合は、このグーツ経営の中に、今言われたように、それが封建的な外皮を持っているとしても、それにもかかわらず共同体内部に成長する労働市場というものを見出されている。ここは先生の独自性が一番よく現われているところではないかと思えます。しかし、この点は大塚さんや高橋さんなんかの見解とかなり違う見解ではないかと思えます。

もう一つは、先程言いましたように、スラヴ的な地域を対象にしたことによって、これは最後の章になるんですけれども、民族問題を取り上げざるを得なくなったということですね。この民族問題というのは、大塚史学の論理のうちに内在しているのかしていないのか、ちょっとよく分からないところなんですけれども、進藤先生の場合は、最終的にこの民族問題から近代ドイツを展望するという形でこの本を終わっているわけです。この点も、大塚史学と進藤先生の距離を感じたもう一つの理由です。ただこの場合、1章から9章と、一番最後の10章の関連がよくつかめなかったというのが率直なところなんですけれども、それにもかかわらず、民族問題で終章を書いたということは、この本を書かれた1968年という時点で先生の問題意識と申しますか、あるいはヴェトナム戦争が本格化する1968年という世界史的な状況が、その20年前に薫陶を受けた大塚史学からの距離を置かせることになっ

た一つの要因になっているのではないかと感じました。

そのことは、序章の中にも11頁のところに、「大塚史学のいわゆる分解論から、そのままに『たたかう民衆』の役割を引き出すことは私にはできなかった」と述べられて、江口朴郎先生に冒及しながら「私にとって甘い近代史からの覚醒」という言葉を使っておられることにも表われているのではないかと思えます。

やはりこの問題は、この本の性格に大きな影響を与えているような気がするわけです。最後に全体としての、非常に外的な印象を言いますと、大塚史学の場合、自生的な国内市場の形成を述べ、そこから国民経済の確立を展望し、そこから民族国家の成立につなげていく論理をもっているように思われるんです。しかし、進藤先生の本は題名は『ドイツ近代成立史』であるけれども、そこで明らかにされたことは、極端な僕の印象を言いますと、「ドイツ近代の成立」じゃなくて、逆に不統一と申しますか、それが成立しないという、多民族国家に分離していくというそういう過程ではなかったのかという、そういう印象を持つわけです。ドイツ統一と言われるけれども、現実にはドイツ帝国とオーストリア・ハンガリー帝国とに分離し、ドイツ民族の分裂が行われるわけで、そういう展望でこの本の第10章の一番最後のページ、374頁が締めくくられています。

橋本 大塚史学との関係でグーツヘルの評価の問題に関して、先生は考えを述べられま

したけれども、林さんの整理について何か付け加えることがありますでしょうか。

進藤 大体林さんの指摘のとおりなんで、実際にドイツの場合には、意識的には国民意識というのはあるにしても、現実の国民国家というのは関税同盟が成立してもなおかつ不十分だったと。極端に言うとなチスにならないと出てこないともいえます。オーストリアを合併し、ズデーテンを併合して初めて現実にはあり得るわけですが、そのときにはファシズムの段階に入っています。

もう一つ、付け加えて言いたいことは、ペーメン・ザクセンなどを取り上げたのは、いわば東西ドイツの中間地帯で、そこには異質といわれる東西ドイツにも何か両者をつなぐ媒介項、あるいは共通性が無いものか、という思いがしたからです。さらにこれを書き終って私の印象なんですけれども、大塚史学が最初に取り上げた夢のようなというのと変ですけども、近代社会というものに対するイメージですね。どういう近代社会を戦後の日本につくるかというときに、この封建制からの移行期を取り上げたこと自体が、我々としては不満だったんですね。現実には、独占資本の段階にあって取り上げなければいけない近代社会であって、自由な資本主義が成立する段階での近代社会というのは、これはある意味では、実践的課題としてそれを取り上げて学問の対象にするということではちょっとまちがっていたのではないかな、というふうな気もするんですね。

橋本 その点は、もうひとつのテーマにかか

わるので、また近代化をめぐる問題は別に議論したいと思います。林さんが出された民族問題について、藤田さん、何かそれをフォローするようなことをお話し下さい。

藤田 藤田 そうですね、民族問題についてということになると、僕は一番面白かったのは、これは先生の本の10章に出てくるんですが、要するに、ペーメンを中心とする啓蒙絶対主義というのか、それがいわば諸外国のプレッシャーの中でむしろ啓蒙的な政策を取らざるを得なかったという、状況の叙述があるんですね。これはやはり興味深い観点ではないか。従来のドイツ問題の取扱いであるプロシア型のグーツヘルとユンカー経営という観点を中心とする場合には、むしろ列強に対抗してプロシア型になるというような議論なんだけれども、先生の観点からみると、その場合もむしろそういう絶対主義の政策をやるその土台は、領主のグーツ経営の場合のように、一種の封建からの脱却を育てていく土壌によって再編強化されるという議論になる。

これは、独自の感じが非常にしたんです。ただ、その延長線上に、さっき林さんもちょっと言ったのですが、ドイツがやはり観念されているのか、結局、それはドイツの統一という形で問題が進められているということなのか。

むしろ、この議論だと林さんはちょっと分裂国家、つまり「ドイツ近代の成立」じゃなくて、不成立だというような言い方をしたけれども、僕はそうじゃなくて、やはりオーストリア的な近代の成立、という問題が出され

ているのではないかと思うのですが、それはドイツ全体とどういう関係にあるのかということをお聞きしたいところなんです。一つのオーストリア・ペーメン型とでも言うべき近代への移行、資本主義の成立という問題と共に、それは同時に、ヨーロッパの厳しい闘いの回廊の中であって、しかもそれなりの文化を築いて根強く生きているというオーストリアを中心とする文化の発展の中での資本主義化であるが故に、ドイツとしての近代の成立にかかわる問題の広がりを持っている。それは今までの近代成立の議論と違った問題を持ち出すかもしれないという気がしているのです。だから、ドイツの中でのオーストリアのそういう発展の独自性とその重さということ、相当意識されてご本が出来上がっているのではないか、そのへんをもうちょっとお聞きしたいと思っています。

遺籙 今、藤田先生から言われた点なんですけれども、やっぱりドイツ史だけやっていると、18世紀の後半というのは、1740年以後というのは、プロイセンとオーストリア・ハプスブルクとの間のドイツにおける覇権争いみたいにとらえられるんですね。現実には、これはマルクスも言っていますけれども、英仏第2次百年戦争の枠の中で動いているんですね。両方とも借金をして、どういう形でお金を借りたのかは追及してないんですけれども、ですから、一つはイギリスの資本主義の発展が、とくに18世紀末から産業革命が既に進行しているということが前提になっている。それから、これは絶対王政の後の問題につな

がるんですけれども、フランス革命とその後のナポレオンの19世紀における支配下にあった、その間のはざまに入っているわけですね。そういう意味で、だからドイツ自体が独自に国家権力として統一していこうとする、その枠の中にはもう一つロシアの圧力もあるんですけれども、我々が想像する以上にロシアの力というのは巨大だったわけですね。ライン川までオーストリア継承戦争のときに来ていますし、それからナポレオン戦争のときはパリまで来ているわけですから、そういう前提を無視して、プロイセンとオーストリアだけを考えることはできないということです。それを非常に象徴的に、しかもプロイセンの場合とオーストリアと比べますと、ハプスブルクというのは中世以来の名門の王家ですね。一方、ホーエンツォレルンというのは30年戦争の後、小さなブランデンブルクから大きくなった。実際は、中世都市ニュルンベルクの城伯だったという意味ではハプスブルクとほとんど同じ時代からあることはあるんですけれども、プロイセンが台頭したのは時期的にはずっと遅い。

そういう中で、どちらかというハプスブルクの方が極めて保守的な体制をとるわけですね。保守的に王朝を維持しようとする。その点では、ちょうどオーストリア継承戦争から7年戦争に変わる間に外交革命というのがあるとですね。そこにはあまり書いてないんですけれども、普通外交革命というのは、ハプスブルクとブルボンが喧嘩していたのが急にひっくり返った。ブルボンとハプスブルクが

手を握ったという言い方で外交革命をいって
いますけれども、社会経済史的に言うと、実
際には王朝国家を維持しようとする同盟がプ
ルボンとハプスブルクをつないだし、ロシア
のロマノフ王朝とつないだ。それに対して、
下からの道での近代国家への脱皮を図って
いくイギリスと、上からの道で資本主義化し
ようとするプロイセンとの同盟というのは、
ある意味では、近代の、当時の保守と革新の、
革新のあり方はドイツとイギリスでは違いま
すけれども、その対抗関係がはっきり出てき
ていると思います。しかもナポレオン以後、
19世紀を通してと言ってもいいと思うん
ですけれども、植民地を除けば、オーストリアと
ロシア、反動化したプロイセンとの神聖同盟、
それにプルボン王朝を復活したフランスとい
う形で出てくる。しかしフランスは相つぐ革
命で脱落しますが。後で第1次大戦で崩壊し
てしまうような東方の3つの帝国はいわば王
朝国家的な意味での保守・反動的な形で近代
化を図ったと見ることができます。

たしかに、プロイセンもビスマルクあたり
から変わります。フリードリヒII世のときと
は別の意味で保守化していることは確かです
けれども、ユンカー経営という形での資本主
義化は進んだんじゃないかと、そんな気がす
るんです。これは、書いてないんですけども
も。やはり外交革命というのは、一つの象
徴だという気がするんです。そしてそれがメ
ッテルニヒ体制につながっていくというふう
に思ってます。

藤田 これは今までの議論と関係があるんで

すが、先生がグーツヘルの変質のところで管
理人支配の問題、非常に新しい問題だとい
うふうに先生もおっしゃっていましたが、その
問題を出されると共に、他のところで、つま
り、第7章ぐらいで麻や綿に自立マニユファ
クチャーみたいなのが出てくるということ
をおっしゃってました。すると、結局プロイ
センのユンカー経営みたいな形で、仮にペー
メン型というふうに言わせてもらいますと、
ペーメン型の場合には、いわば資本主義的な
経営につながるきっかけになるものは一体何
なのか、グーツヘルが直接つながるとい
うことはちょっと考えられないような感じも
するんですが、だから、どういう形で資本主
義的な経営につながるのか、その媒介は何
なのか、自立マニユファクチャーを考
えていらっしゃるのか、それとも何かほか
のコースで考えておられるのですか。

進藤 一つは、やはり絶対王政に結び付いた
のは宮廷貴族で、高級貴族がいちはやく領
土マニユファクチャーをやっていくんですね。
繊維なんかですと、要するに織布工
程じゃなくて、仕上げ工をまず押えてい
くから、その下には下請け的なものは残
っているわけです。その中で、一方では、
これはあちこちから褒められたり文句を
言われたりしたんですけども、ペーメン
の中でもファクターという形で僕は書い
て、あれは正しい訳かどうかわからないに
しても、シレジアを奪われてからペーメン
に重点を移すんですね。絶対王政とい
うのは自営の農民を育てようという方向
ですから、そういう形では間屋制支配を
下か

ら崩すような自生的なものがあった。時間がないから簡単に言いますが、それが実は19世紀に入って、オーストリア帝国の中で資本主義化してくチェコの民族資本ですね。チェコ人の民族資本をそこに育てる基盤が隠れていたんじゃないか。換言すれば、併存していたんじゃないかというんですね。

ことに、大貴族の場合のマニユファクチャーというのは、ほとんどウィーンの金融資本が入ってきますから、次第に今のはやりの言葉で言えば空洞化してしまって、19世紀ぐらいになるとみんな工場の中核マニユファクチャーあるいは領主工場の中核はブルジョア市民階級に握られてきますけれども、実際には領主自身が資本家みたいになっていきますけれども、そういう自生的なブルジョアジーとの併存の中で、19世紀の後半になって、産業革命に入る段階でそれがオーストリアの中に、特に精糖、サトウダイコンをとおして、資本が集積していったんじゃないかというふうに。ですから、ベーメンあるいはチェコ民族資本の場合には、上からの道は、ある意味では空洞化してしまっただけですね。

橋本 それでは別の問題があればご質問下さい。

藤田 非常に末端的なことなんですけれども、貨幣の「ターラ」という単位が出てきますが、あれはどのような単位なのですか。僕の記憶だとあれは銀貨の名前だと思うんですが、「ターラ」というのは「グラー」につながる語源だということに聞いているんですね。ターラとグラー、ドルですが、二つを媒介するもの

は一体何でしょうか。恐らく、ボヘミアの谷で取れた銀貨だと思いますが。

進藤 それはヨアヒムスターラーという、キューリ夫人がラジウムを持っていったのはあそこからなんです。オーストリアから持っていったというのは、このボク山から、今はウランが出るんですけども、そこからターラーというドイツ語がグラーになったというのがチェコ人も言うし、あちこちで言っているんです。初めは、やはり銀です。ヨアヒムスターラーというのは銀が採れるところで、銀本位に近かったんですね。それが、やはりオーストリア・ハンガリーの中でもスロバキアの方は、ハンガリーの方はフォリントといって金なんです。それがグールドという単位、ゴールドからきているんじゃないかと思うんですが、実際その貨幣史はもっと丹念に見ないと、その当時幾らくらいたったかとかというのはよくわからないんですけども、プロイセンとバイエルンが一緒になったときに、通貨は、プロイセンがターラーで、バイエルンがグールドでしたが、どちらか忘れたんですが、たしか2ターラー：3、5グールドでもって交換されるんですね。オーストリアはグールドもしくはクロネを使ったりしていますが。林 民族問題をもうちょっとお聞きしたいと思います。この本の一番最後の頁の一行と一番最初の頁の一行なんですけれども「民族主義運動は近代社会の成立とともに、その主体的担い手を交えねばならなかったのである」というところで、この本は終わっているんですね。ところが、最初は「19世紀中葉、反革

命の勝利に終わった1848年の3月革命の時代まで遡ろう」となっています。結局一番最後の「近代社会の成立とともにその担い手を変えねばならなかったのである」というところでは、恐らくプロレタリアートというようなことを意識されていると思うんです。これは、さっき言いかけたことなんですけれども、最近の1970年代以降の研究の中で、特に良知力さん等が言われるのは、近代社会の成立に対してプロレタリアートというのは、ドイツ地域について言えば、スラブ的な諸民族が具体的にはブルジョア革命に対して反革命の役割をになって表われ、動員されたということだと思います。そうしますと、近代社会の展望ということとプロレタリアートということは、必ずしも直接的には結びつかないということを考えざるをえないわけです。そのへんに関する、先生の本が出た後の最近の1848年革命研究の進展に対して、どういうことを考えられているかお聞きしたいと思います。

進藤 はっきり言うと、大塚史学でも、我々の世代以後というのはほとんど独占の時期を扱うんです。それで大塚久雄さん自身も『近代欧州経済史序説』を上巻だけで止めて、書かれなかったわけです。それは大塚さんに直接伺っていたんですが、そういうところに問題意識が、若い人と大塚さんの時代の意識と、我々の意識とでは多少ずれがあったんじゃないか。そのことは大塚史学の中でもかなり顕著に出てきたということが言えるんです。

もう一つ、民族の問題は、ウィーンをとらえますと、オーストリア＝ハンガリー帝国、1867

年で二重帝国になるでしょう。実はそれ以前からマリア・テレージアの前の時代から、オーストリアとベーメンは一緒に扱われるんですね。その中で移動はかなり自由なんです。だから、とくにベーメンの土地から離されたチェコ人たちはウィーンにどンドン行っちゃうわけです。ブラハにも来るけれども。しかし、ブラハに残ったプロレタリアートはそれほど反動的な役割を果さなかったのかもしれない。逆に言うと、良知さんみたいな方法で、あるいは最近ベルリンをやった人がいますが、ああいうパンフレットやなんかでプロレタリアートが1848年のとき、ブラハの庶民が何を考えていたのかというのは、やはり実証しないとと言えないんじゃないかと思いますけれども、必ずしも、反革命だけだとは、僕は言い切れないように思うんです。

ただ、極端な反革命にはならなかったけれども、やはり、チェコ民族資本に食い込まれてしまって、取り込まれてしまった面はあるんじゃないかと、チェコの民族主義の中にプロレタリアートが。それはやはりバラツキーだとか、それ以後のチェコのナショナリズムをみると、逆に言うと、バラツキーでは、僕が言う意味でのプロレタリアートが主役になるような形での近代社会、社会主義とは言わないけれども、みんな取り込まれてしまったんじゃないかという気がするんです。

橋本 それでは、大塚史学とのかかわりでもいいですし、今出された近代化との関係でもいいですけども、山辺さん、少し問題を出していただけますか。



山辺知紀 近代化ということで言えば、最近近代社会に対するとらえ方もずい分変わってきていると思います。それへの幻滅というんですか、そっちの方が大きい問題になっている。そこで聞きたいのですが、大塚さんなんか出してこられた近代化論というものに対して、先生ご自身がどういう形でそれを考えておられたのか、近代社会というものに対する評価は、この本を書かれた時から今までの20年間の間で、変化されたのかどうか。抽象的な言い方かもしれませんが、最近では、新従属派のような、新しい歴史のとらえ方が出てきて、その中で、西欧近代というものに対する、強烈なアンチテーゼというところが大袈裟かもしれませんが、種々の批判が出てくると思うんですね。進藤先生もやはり東欧という西欧の周辺というところからものをみておられるわけで、その視点からは、今新しく出てきたそういう歴史理論というものを、どのようにお考えになるか、というようなことをおうかがいします。

進藤 実は、1968年に書き終わった段階で、69年に学生紛争になって、結局チェコへ逃げていったわけですね。しかし、そのとき異常に感じたのは、僕たちが習った西洋史なり西

洋経済史というのと、チェコ人が現代にあって意識している歴史意識というのはかなりズレがあるわけですね。端的に言うと、プラハの町というのはチェコ人にとってはチェコの町。ドイツ人になると堂々とドイツの最古の町だというような言い方を、今でも都市の研究者が言うんですね。そんなことを言ったらチェコ人は怒るだろうなと思うぐらいなことを言うし、そういう意味で、ではチェコ人というのは自分の歴史をどういうふうに理解しているんだろうな、というような関心は持って行って、だんだん時代を上へ上げてしまったんです。だからそういう意味では、山辺さんの質問には充分答えられないんですけども。やはり、その中で、一つはごく最近ですけれども、いろんな新しい歴史のとらえ方がありますね。ここに持ってきたんですけども、ごく最近だと、有名なポール・ケネディの『大國の興亡』というのはハブスブルクから始まるんですね。こっちの、フェルナン・ブローデルのアナール派の、これだったら13世紀ぐらいから資本主義ということを出すんです。やはり、今の時期というのが、僕がちょうど学生時代育った時期と同じように、ちょっと違った意味で資本主義の危機だろうと、そうするとまた歴史家は、あるいは経済学者というのは、相変わらず封建的危機の時代と言われている15～16世紀まで視野を広げてきている。しかし発想は先進資本主義国を中心にして見るんじゃなくて、周辺、逆に言うと支配されている側とか、停滞している側をも含めた、全体的な視野というのを

今の新しい歴史家は持とうとしている。ただ、それを理論的にうまく組み立てているかどうかは、僕はまだ不満ですけども、できていとは思いませんけれども、やはりそれは必要だし、これから追求すべき点じゃないかというふうに思います。

もう一つ持ってきたんですけども、封建的のというと、社会経済史でいうと、農民が非常に苦勞していると、ある意味では国富、国の富が、正確には人民の富・民富でしょうがマクロでいっても衰退しているんじゃないかというふうに取りれる面が多いと思うんですけども、一方では、チェコへ行ってびっくりしたんですが、皇帝ルドルフⅡ世というのがいるんですね。17世紀の前半に。これはウィーンからブラハに居城を移して、その後マティアスと喧嘩をして、それでフェルディナントⅡ世になって30年戦争になって、その時代というのは、ここでは「魔術の帝国」という形でイギリス人が書いているんですが、これがマニエリスムの時代なんですね。16世紀の文化というのはかなり高いんです。高度で非常にコスモポリタンのんですけども、これは僕が最近感じていることなんですけども、15～16世紀の中で特にフランドル地方をオーストリアが、正確にはハプスブルク家が持ちますね、スペイン継承戦争の後ではオーストリア・ハプスブルク家が。そのフランドル派の影響を強く受けている。特に、皇帝カールⅤ世にしてもフェルディナントⅠ世にしても、エラスムスの教えを受けているんですね。それが一種の汎知主義という、何でも知ろう

とする、要するに中世の神の世界と、これから合理的になろうとするプロセスの中で錬金術なんというのが生まれてくるという、そういう時期で、しかも富はかなり上の方に集中していた。

逆に言うと、フッカーなんかもあれだけ金を集めるということは、農民自身は貧乏であったかもしれないけれども、社会全体としてはかなり富が蓄積されている。特に、スペインをとおしてアメリカから金や銀が入ってきて、価格革命を起こすわけですから、富が集積されていった。それが、農民にはもちろんいかないで、上の方で高い文化をつくった。そうすると、ハプスブルク世界帝国では、そこは非常に多民族国家ですし、そうすると民族よりもむしろ個人の生活というところにだんだん焦点がいく。それと社会的分業、商品流通とが結び付いていくんじゃないか。

ご承知のように、その後が「バロック」です。バロックというと、普通は封建反動と同じような意味で、カトリックの反動宗教改革の中から出てくるんですけども、その中には、やはりお祭りのな要素というのは民衆の中にも意外にあるんですね。そういうのがもう一つそこにもあるんですけども、シュタイエルマルクあたりで、「民衆バロックと郷土」という本が出ていますね。これはシュタイエルマルク出身の歴史家が書いていますけども、そういうバロックをやっぱり見直さなければいけないんじゃないかなと思う。今、世紀末になってくると、そういうコスモポリタンのな、かなり派手な、僕はよくわか

らないけれども、今音楽でもバロックの世界に日本人でも愛好して入っている。それと19世紀末の、世紀末のウィーンやなんか典型的に出てくるピーターマイヤーという文化、小市民的な文化という、これは経済的な、構造的には危機に陥ったときに意外に市民が逃避するひとつの場として、その中から特異の文化というのも生まれるんじゃないかなと、そんな感じを今持っているんです。たとえ類腐的であったとしても、家族的にはかなり健全であったといつてよいでしょう。

オーストリア・マルクス主義だとか、フロイトだとか、メンガーだとかは、やはり19世紀末のウィーンじゃなければ出てこなかったんじゃないかという、そういう気持ちです。それが16世紀にも一つの合理主義を生み出した後で、近代物理学にいたり、科学的合理主義にいたり、ちょうど時期的に対応するような、そうした印象をもちます。

水谷良夫 進藤先生に一番お聞きしたい問題の焦点は、西ヨーロッパの近代というものに対する評価にかかわってくると思います。ごく大雑把に、私なりにお聞きしたいことを3つぐらいに整理してみたのですが、これは最近よく言われていることですが、いわゆる「近代」そのもの、あるいは「近代化」ということについての枠組みの見直しということが、最近では、ある意味で日常的な議論の場に登場してきている。私自身も、1960年代に一方で大塚史学に代表されるような西洋経済史を勉強しながら、他方で、先生も若干論及されていますけれども、例のロストウに

代表されるような非常に単線的な発展段階論というようなものが出てきた時代に、大塚史学に言えば学問的な世界に入っていったということになるわけです。そういう時代から丁度20年余り経ちましたが、この間、戦後アメリカ体制というようなものが相当程度揺らでできているといわれているものの、大塚史学に代表されるような「国民経済」とか「国民国家」というような伝統的なカテゴリー自体がますますフィクションになってきているという事実は否定できません。

経済学は、依然として国民経済と国民国家という枠組みでものを考えようとしているわけですが、そういう意味で、大塚史学に見られるような近代社会把握というようなものも、これまた従来のような影響力といますか、現実認識における有効性を持たなくなってきているように思います。それに対応するように、先程先生ご自身も紹介されたような「プロト工業化論」であるとか、あるいは社会史であるとかといったような、伝統的なパラダイムに対するチャレンジが起こってきていると思いますが、その辺のところをまず第1にお聞きしたいのです。

それから第2番目は、西ヨーロッパ近代の自己相対化という側面を一方で持ちながら、他方でそれ自体を普遍化したりあるいは一般化していくようなものとして「世界システム論」あるいはウォーラスティンに代表されるような、「世界経済システム」としての資本主義というような、つまり近代自体が中枢と周辺というような、非常にハイアラキーな構造

を持って現われてくるということ自体をトータルにとらえようという、そういう動きが出てくる。そのことについても、同時代に生きる歴史家としてどんなことを考えていらっしゃるのかということを知りたい。

それから3つ目は、今の2つの問題と関連するんですけども、要するに、西ヨーロッパで最初に現われてくるような近代社会の地平というものをまず何らかの形で確定すること、あるいはそこから距離を確定した上で、この近代という時代が約束された時間に向かって進んでいくというような、言ってみれば目的論的な史観というものが強調されてきたわけですが、そして私自身もそういう中で自分の考えをトレーニングしてきたわけですが、そういうこと自体が今問われているという、言ってみれば「パラダイムなき時代」とも言われているわけで、先生にとっては前提そのものが問われているという議論になると思うんですけども、そんなこともぜひ伺いたい。

進藤 水谷さんの質問に対するお答えになるかどうか分からないんですけども、ロストウなんかも、僕なんかも読みましたし、今プロト工業化というのを大学院の学生がやっているの、どうも僕にはよく分からないんですけど、ただ言えることは、経済学に対する根拠ごとになるかもしれないんですけども、国民経済という理念、考え方というのはスミスにもあったのかどうか知りませんが、やっぱり歴史学派の考え方じゃないかと思うんですね。リストから。よく言われるように、ポリティカル・エコノミーからナショナル・



エコノミーというような、国民経済という形で経済学をつくりあげたのはむしろドイツだった。これに対してはメンガーが批判しておりますけれども、そういう場合に、ドイツでは現実には国民経済がなかったわけですね。にもかかわらず、国民経済という経済学を打ち立てたが、19世紀の末にもう既に破産している。

それでは、一方では、これは僕はよくわからないんですが、メンガーを始め、いわゆる近代経済学といわれるものが、なぜ国民所得論という形でやっていくのか。国民経済を前提にした考え方ですね、フローの中で。これでいいのかなと、今度は逆に近代経済学に対してもそれを感じるんですね。国民所得論というと、ほとんど全部合計してやるわけですから、内部の差はほとんど消えてしまうような形でしか出ない。いろいろ産業連関論やなんかでそれは直せるとは思いますけれども、そういった意味で、現代の経済学がマルクス経済学も近代経済学も何らかの形で少くとも国民経済という枠組みについては理論的に問われているんじゃないかというのが、これは門前の小僧で、経済学をやらなかったのに、そういう感じがするんですが。

ただ、その場合に、どっちもやはり西ヨーロッパを前提にしているんですね。すると、東ヨーロッパとか、ほかの国々の経済史をやるとうると、そのパラダイムではマルクスでもそうですけれども、近代経済学でも、どうもとらえきれないというので、僕自身は経済史という形もあって、もっと古い意味で、一つはやはりとりあえずスラヴ人の民族主義、チェコ人の民族主義というもの「源泉」というのはどこにあるんだらうというのを経済史的にとらえてみようと思ったのです。すると一つは基礎にあるのは農業だ。農業というのは、ヨーロッパには野生の麦がないんですね。だからどこからか来たというふうになる。結局今までの従来の世界史ではオリエントの世界から、ギリシア、ローマへ行って西ヨーロッパへ行くんです。その中でイギリスだとかいろいろあとで分かりますけれども、そういう地中海世界につながる世界史の展開でなくて、逆に言うと、意表をつくようですが、フン族のアッチラの帝国に代表されるような、ウクライナあたりから直接ドナウの北ラインの東に入って行って、カトラウヌムの戦いで敗れざる。といった世界というのがあるんじゃないか。

これはロストフツェフなんかは第1次大戦直後ぐらいにも言っているんですけども、スキタイからの采譜を引くような遊牧国家の影響がヨーロッパの中世に影響していると。そう言われてみますと、間にケルト人が入るんですね。ケルト人の世界というのは紀元前に1千年ぐらいあるわけです。かなり高度の

文化をもって。その中で、ローマとの接触を考えると、例えば紀元前387年ぐらいにローマをケルト人が略奪するんですね。それを境にしてローマの共和制が確立するんです。その次に、今度はキンプリ・トイトニの南下があるわけですね。これはゲルマン人ですけれども。そうすると、そこでマリウスの軍制改革があって、帝政に入っていく。だから、ローマの歴史はローマだけの歴史じゃなくて、北方にいた人たちの南下の圧力の中で確立していく。そしてしかもシーザーの段階で今のフランスにガロ＝ローマンという一つの世界ができたんじゃないか。これは、フランクが受け継いだわけですね。それと、ラインの東からドナウの北、タキトウスのいうゲルマニアの大地というのは、それまではローマからはほとんど手を付けられていないわけです。別の世界があったんじゃないかと、一つそれを痛感したわけです。

そうすると、ヨーロッパの封建制というのは、ガロ＝ローマンの世界から生まれてきている。要するに、ガロ＝ローマンの世界にゲルマン人、ことにフランクですが、入って行ってそこで同化していく。そのことは従来からの世界史も取り上げているわけですね。ゲルマンとローマの二元性の克服で封建制ができたというふうにいっているんですね。でも、もう一つ帝政期のローマの世界を築いてきたキリスト教の世界なんです。キリスト教の世界といっても、あれは神の国ですか、あの段階では政治権力が民族大移動があったので事実上崩壊し、教会自身が教会の財産をもつ

ているわけですね。ローマ帝国の中に。ところが、フランクが入ってきて、何とか教会財産を自分の方に組み入れようとする、その入れようとする私有教会制というのは、実はラインの東、ドナウの北では、既にケルト人でもキリスト教以前の段階で自分たちの祭祀・宗教を持っていて、それを自分たち家族・部族の財産として持っていて、それがキリスト教化しただけで、私有教会制というのは、フランクの中で育ったんじゃないかと、既にゲルマンの社会でも、それに先行するケルトの社会でも、そういうのがあったんじゃないかということが、一つあるわけです。

そうすると、封建制が東方植民でスラヴ人の地域に入っていくんですけども、スラヴ人の立場というのは全く書いてないわけですね。ドイツ人の東方植民でしょう。スラヴ人はどうなったというのかは何も書いてないわけです。それとは逆に、今度はロシアの側からスラヴ人はどうなっているという発想もあるわけですけども、そうなってくると、封建的というのは東ヨーロッパの場合にはむしろ農奴制はロシアの場合一時言われたんですけども、少なくとも、14世紀以降に農奴制、東ヨーロッパの場合に、いわば部族的な自由民が、西ヨーロッパでできた封建制に組み込まれた形で特異なものを作り上げた。そういうふうに考えたかどうかという気もするんですね。そうすると、いってみれば北ゲルマンの大地と言われているところで独自に展開してきた歴史と、地中海からの歴史とが接触して封建制になっていく。それと同じ

ような形で、例えば日本の文化なんていうのはどこからそういうふうに分かれていくのか、そして独自の展開を遂げていって、15世紀以降にグローバルな形でヨーロッパ文化と接触すると。特に、インカだとかアズテック文化だとか、全く離れているわけですけども、やっぱり新しい発想、それは文化の環境が違っているから、文化は多元的にできたから、それはお互いの交渉によってできたというだけでは済まない、やはり発展法則の中でそれを理解できるような民族文化の違いとか、地域文化の違いというのがあるんじゃないか。そういうものの一つの例として、一回ペーメンをもう一度取り上げて見たいというふうに僕は思っております。

橋本 封建制から近代への移行の問題をきっかけにして、古代から封建制への移行の問題まで含んでの話になったんですけども、私の勝手な理解で言うと、特に地中海世界だけの、あるいはローマ帝国の解体過程という枠内だけでとらえずに、その周辺だとか辺境というような地域もセットにしてというんですか、複合構造体というような言い方を最近の研究者はしておりますけれども、そういう中でとらえると恐らく進藤先生の言われる近代化の過程においても、西欧対東欧というような形で単純に図式化せずに、その相互関係というものを問題にするということになるのではないのでしょうか。このへんは水谷さんが出された問題に少しリンクするところですが、もうすこしご意見があればどうぞ。

進藤 水谷さんが言った、いわゆる今の辺境

とか中間地帯というところえ方はやっぱり西ヨーロッパ中心の考え方を克服してないと思うんですね。もっとやっぱり別の主体的な歴史を担った人たちというのが、世界経済の中に組み込まれているんじゃないかと。その一番いい例が、逆に言う和日本じゃないかなという気もするんですけどもね。

水谷 その場合に、多元的な発生史を持っているといっても、依然として先程の例で言えば、大塚史学でいわれる比較経済史というような形で基準となる、あるいは意味付与していく基準となるのは、西ヨーロッパの近代というところにおいては変わらないわけですね。

進藤 いままでの、今の新しい理論というのはね。僕はそれじゃいけないんじゃないかと思うんです。

山辺 そのへんのところではひっかかるところなんです、確かに西ヨーロッパというところの目ばかりではなく、周辺というようなものの時間も歴史の担い手としてあったのではないかと言われますが。しかし、現実の歴史として我々が目の前に見ているもの、見てきたものというのは、やっぱり西欧近代というものに領導された時間というか、そういう歴史に収斂されてしまう。

確かに多元性はあったとしても、それらは、メインなものへと吸い込まれる形で、具体的には近代化ということですが、その歴史で動いている。とすればいくら多元性をいっても、その多元性は近代化の種々のヴァリエーションでしかない。ですから、多元性が言われるんでしたら、この多元性によってこのメイン

な軸をどう変えられたかあるいは、変えるかという、その問題が必要だと思うんですね。そこが出てこない、逆に言うと、個々の周辺の問題というのは生きてこないだろうと思うんですね。時間をどうずらされるのかということが問題なのではないでしょうか。

進藤 ただ、非常に面白いことは、近代農業というのは麦が主体でしょう。ジャガイモが主体になってきているんですね。これはアメリカ産なんですね。16世紀に入ってヨーロッパの農業を根本的に変えてしまったわけです。お米はどうなるのかという気もするんですね。西ヨーロッパだけに収斂されて、それが世界を支配するという意味ではないと思うんですが、たとえばイスラムの世界はどうだったのか。時代的制約はあるとしても。

お米と麦とジャガイモ、トウモロコシ、これはやっぱり原生地は違うと思うんです。それを組み込んでしまったヨーロッパというところに視点を置けば、今言われたように西ヨーロッパを無視するということは絶対できないんですけども、比重をそこだけに絞ってしまった発展段階説というのはちょっとおかしいんじゃないかな。別の発展段階説があていんじゃないかな。基準となる西欧的な近代も、近々500年に亘るだけで、その後の世界これからの世界も、これを基準にできるか、疑問もあるのです。

藤田 方法論のかなり根本的な問題にさしかかろうとしているんだけど、西欧経済、あるいは西洋史というエリアがあるんですね。そういうものが成り立つかどうかという問題

になってくると思いますが、逆に言うと、そういういわば多元的な発生史的観点という立場に立つと、限りなく空間的な世界に分散する、すると結局限りなく文化人類学的なところへ進んでいき、だんだんある種の歴史学の迷路というものができてくるんじゃないかというような感じがしないでもないんですけども。その点はどうですか。僕も文化史的な方法にはずっと以前からこだわっているんですけども、どうしても分散的になってしまう。しかし、他方では、世界は一つというような発想というのは抽象的に思えて、どうしてもそういうふうになり得ないんですね。まだ西欧とか東欧とか、そういう形でとらえる方が非常にリアリステックで、いわば歴史という縦の時間の経過でものが見れる。だから、空間的なものにどんどん分散化しながら時間の推移を内容とする歴史学の方法というのは、どういう形でありうるのかが改めて問われるのではないのでしょうか。

進藤 例えばウエーバーなんかもみんな分散しますね。あちこちって収拾がつかなくなると、そういう面は確かにあると思うんですね。経済学にもあるし、歴史学にもあると思うんですね。やっぱり、僕も藤田先生と同じように何かあるだろうと。そうすると、一つはマルクスの考え方というのは一つのかなり僕にとっては中心的なものですけれども、ただマルクスの解釈が非常に教条主義的に解釈されれば駄目になっちゃうし、そうじゃなくて、マルクスの言外に書いているものを読んで見ると、例えば先行諸形態を読んでも、共

同体の問題を言っているんですね。しかし、個々の共同体との間の関係、あるいは上下の関係ということについては、マルクスはあまり言っていないですね。ただ、先行諸形態の3つの形態をやったあと、遊牧民族の問題が出てきて、奴隷制や農奴制の問題を取り上げますが、あそこで初めて上の共同体、要するに征服者の共同体と被征服者の共同体、縦の系列によっている。ローマ帝国も、マルクスで言えば古典的形態というのは、共和政のローマには適応できても、帝政期のローマには適応できないという、これは弓削達さんがはっきりローマは支配共同体であって、その下に共同体があると、それと縦の関係があるということを使うわけですね。僕もここで労働市場というのを取り上げたときにも感じたんですけども、労働市場というのは、労働力という単純な形から言えば均一かもしれないけれども、現実に現われる市場というのは何重にも重なる構造、重層的な構造を持っているんじゃないか。共同体も重層的に構成されているけれども、市場も、ことに労働力市場をやった場合につくづく思ったんですけども、最近ではよく二重の市場構造と言いますが、これは一般的な商品流通の市場でも同じなんだと思うんですね。ウエーバーが古代と近代との商業＝流通市場とを区別した。大塚久雄さんも遠隔地商業と共同体内商業とを区別した。区別するのはいいけれども、それが一緒になるところ、接触するところもあるんですね。例えば、地代として取得した領主が、大塚さんの言うところの局地的市場圏と

いうのがあれば、そこに商品なら商品、貨幣なら貨幣という形で投資するでしょう。それによって独占することができるわけです。その場合の市場というのはやっぱり二重構造なり重層的な構造をとっているんじゃないか。ただ、貨幣から見た市場といえは均一化するけれども。

もう一つは、ポランニーなんかが言っているような形で、一般には流通の中から貨幣を引っ張り出して、貨幣論を展開しますね。普通は。だけどそうじゃないことをポランニーは言っているんですね。あんなことを言われると、ますますこっちは混乱してきているというのが今の段階なんですね。

山辺 さっき藤田先生が言われたこととも関係すると思うんですけど、西洋史というようなものが成立するののかという問題と同時に、歴史自身が多元化していった社会史とか文化史とかにあってしまい、逆に時間がわからなくなっている。でも歴史をやる以上やっぱりどこかに時間を置きたいという。それで周辺の地域の歴史を取り上げることになるのかも知れません。でもそれだけでは答えにはなっていないんじゃないでしょうか。歴史ということを考える場合にはどうしても目的とかあるいは一つの時間とかというようなことを設定せざるを得ないわけですけども、というよりも、逆に我々一定の目的というのがあるから、歴史ということを考えるというようになところもあるわけで、そっちの方が普通じゃないかと思うんですが、ですから、そういう時間というようなものが消えていくというこ

とは、同時に目的が喪失していくというのか、方向性というものが失われてきたということの方が言われていることであって、ですからそのときに、ここでただマルクスと言われても、ちょっとそのへんがずれるんです。

橋本 山辺さんがいま使われた目的という言葉は、それは何を言おうとしておられるのですか。

山辺 長い間歴史のテーマでありつづけた近代化というものの現代での問い直し、あるいは具体的には、近代の乗り越えという問題だと思いますけれども。

橋本 その点で言うと、藤田さんが先程示された理解は歴史研究の方からは少し違和感があって、地域ごとに別々に歴史の筋を縦に通せばいいではないかということでしょうけれども、少なくとも近代という時代はそういうわけにはいかない。例えば、アジアにおいては西欧中心史観といったなまやさしいものではなく、植民地アジアにとっては独立・自立した歴史展開はあり得ないわけで、帝国主義の支配のもとでの歴史、植民地あるいは半植民地・半封建という中でアジアの歴史という問題を設定せざるを得ないわけですね。進藤先生が立てられた問題でいいますと、西欧・東欧というような関係と、西欧・アジアという関係の比較検討することあたりに接点がないのかなと思います。

進藤 橋本さんが言ったように、常に今だって帝国主義が現在あるところでの第3世界ですから、それと同じことが産業革命を経たイギリスを前提にしなければドイツは考えられ

ません。1968年の段階で僕が考えていたのは、やっぱり東ヨーロッパと西ヨーロッパという考え方だったんですけども、東ヨーロッパというのは、逆にいうと先進的な資本主義、それは独占にまでいく。その国と、後はそれに支配され、あるいは植民地化されて、影響されているアジアという言葉で言えばアジアでもいいと思うんですが、アジア的という意味で植民地的な場合にはアジアでいい。その植民地的な意味でのアジアとヨーロッパの接点として東ヨーロッパがあると。だから、独自にヨーロッパという世界があって、東ヨーロッパと西ヨーロッパが対立しているという19世紀的な、ドイツの場合東西ドイツになりますけれども、東欧と西欧とか、東ドイツと西ドイツというそういう発想でなくて、やはり資本主義を担ってきた主体的な国家と、それに対するものと、その一つとしての東ヨーロッパというふうにして見ないと、世界史にはいかないのではないかと。

事実、マルクス自身、ロシアがツァーリズムだったからですけれども、スラヴ人に対してすごいことをいっているんですね。

橋本 水谷さんが出された問題でおおいに議論が弾んだので、少しまとめた発音してもらえないでしょうか。

水谷 先生の最後のまとめはちょっと分かりにくかったんですけども、要するに19世紀から20世紀になると、先進国と植民地というような垂直的な分業、ないしは垂直的な支配という、いってみればレーニンの世界が現実化することと、これと西と東、西の世界と

東の世界というものがどう関連しているというふうにおっしゃりたいのですか。

進藤 レーニンの言えば植民地的なものの一部に東ヨーロッパが入るんです。ヨーロッパとアジアじゃなくて、西ヨーロッパと東欧を含めた広範なほかの世界という。ただ、チェコだけがさっき言ったように自生的に民族資本を持ってきていくんですね。これはやはり一番西ヨーロッパに近かったということもあると思うんですけども、後は資本主義的發展をとげた日本ですね。あるいは東アジアあたりでどうなるか。

水谷 先程私がちよっと口を滑らしたような、目的というような言葉で言ったんですけども、近代という時間が、あるいは近代という時代が一つの完成に向かって進んでいくというような、そういう史観が先生の場合には確固とした前提にある。このご本の序文の中でもそれがうかがえますし、例えば林さんの指摘がありました、「闘う勤労大衆」という言葉も何回も出てくるんですね。しかし我々はいま甘い近代主義の中で、覚醒していくのではなくて、眠りこけている。こういう時代の中で、先生の思いといいますか、近代に託した思いというものを最後に伺っておきたいんです。

進藤 難しいですね。ただ、今の学生諸君とかサラリーマンとかを見ていて、確かに、結果的にいうとやはり働いている人たちの運動以外に、やはり本当の人間性を回復するような基本的人権・民主主義・自由を民衆のなかに定着させるような戦い方というのはない

んじゃないかと。はっきりいって、権力を階級的にも個人的にも持てば腐敗する。ただ、腐敗に対して庶民はどう対応するかというと、必ずしも真っ向から戦うようなことはあからさまにはしないし、してもつぶされるというのは農民たちの歴史を見ればわかるわけで、しかしそれにもかかわらず、一つひとつ歴史は人間性の回復にもう一度戻っていくという意味では、マルクス主義もそのとおりだと思うんですけども。そのプロセスの中では、やはり今流行の小市民的な生き方の中で、例えば自分の家族を大事にするとか、そういうような形、そしてしかも自由に行動するというような、ピーダーマイヤーだとか、そういう小市民的な動きというのは出て来るんじゃないか。特にそれを感じたのは、マリア・テレジアなんかの場合は、言ってみれば、ハプスブルクという封建社会の中で、マリア・テレジアというのは啓蒙思潮をあまり勉強してないはずなんです。大体、皇帝になるつもりはなかったらしいから。ですから、非常にカトリック的な形ですけれども、王宮の中に市民的な家族関係を猛烈に強く出すんです。要するに、自分の子供に対する手紙なんかを見ると、今の教育ママと同じような体制なんです。ただ、我々と違うのは、選ばれた王家であるという一つの限界というか、自負がありますけれども。逆にいうと、ハプスブルクの中のヨーハン大公、フランクフルトに行ったヨーハン大公なんて郵便局の娘さんと結婚して、王様に認めさせて、そしてメラン伯爵夫人にしてやっている。あるいは、暗

殺されたフェルディナントにしても、子供には継承権がないような形で家庭生活は維持しようとする。そういう、いわゆる封建制の末期における王朝のあり方と、我々市民社会における最後の我々の家庭生活のあり方というのは、何か似ているような感じがして、それだけのことをマリア・テレジアはやったわけなんですけれども。16人子供を産んでいるくらいですから夫婦仲がいいんですね。恋愛結婚だし。

山辺 確かに進藤先生が書かれておられることは分かるのですが、それ以後の現実の中では、労働者による人類の解放というテーマそのものが見えなくなってきている。それが今の一番大きな問題の一つでして、それを抜くために一体歴史というのはどうするのか、あるいはどういう時間設定をしたらいいのかというところがあると思うんです。確かに進藤先生とお話していると、タイムマシンでバックと16世紀に行ってまた現代に戻ってこられるようで、なかなか分かりにくいのですが、逆に、ある意味では最今の歴史研究というのは意外とそういうところを持っていて、16世紀ぐらいから資本主義が成立して、それが今でも全然変わらずに、資本主義としては成立していると考えて、近代化というテーマそれ自身をその成立時に戻って相対化しようとしているように見えるんですね。それこそまさに時間ゼロという形でものを考えていて、きっとそういう意味では常にタイムマシンに戻って、今現在ここにいると、そういうことは確かにいえると思うんです。

橋本 仲々議論は尽きないのですが、少し話を移します。進藤先生は金沢大学へ1951年に赴任されましたから、かれこれ40年近く大学で、金沢で生活されたわけです。その間で、何か印象に残ったようなことを少しお話いただけますでしょうか。

進藤 大学の中ではかなり教授の権限が強かったので、大分喧嘩したことだけは確かなんですけども、後で学部長なんか管理職になって、その板挟みになって苦勞するという、それはそれとして、大学の中の問題なんですけれども、ちょうど僕らが来た段階というのは、レッドパージが済んだ後なんです。学生の中からもレッドパージで退学になったのが出ているけれども、そういう学生たちの力で、教官の中からは誰もレッドパージを出さないで済んだと、そういう学生のかかなり強い運動というんですか、意識というのがここにはあった。時代的にいって、やはり旧制の高等学校から新制の金沢大学に来た人たちが、一回生、二回生にはたくさんいましたから。そういう意味では、何らか形で戦争にかかわった非常に質の高い学生が多かったということ。同時に、やはり内灘闘争があれだけできたというのも、そういう状況の中だったんじゃないかと。ただ、レッドパージに対する批判というのがあまり表面へ出なかったという、GHQのせいもあるんでしょうけれども。

僕にとっては内灘闘争の経験というのは、かなり印象的だったんですね。特に、村のお巡りさん、あるいは金沢のお巡りさんではもう抑えきれなくなって、大阪から警察学校の

生徒を引き連れて来て抑えなければいけないというような段階だったし、60年安保が最大の盛り上がりだったし、事実、大学の先生がほとんどそれに参加したということ。しかし、60年安保がああいう形で終わった後というのは、労働組合でもいわゆる右旋回が起こるわけですね。それに対して、大学の先生方が、これは皆さん御存じかどうか知らないんですけど、若手ばかりじゃなくて、現状分析の会というのが法文学部の中に出てきて、そして、教育学部や理学部なんかからも加わって、大学の先生方の意志統一というのはかなりできてきたと思っています。それが、今度市民運動に対しては、1955年ぐらいから原水協ができればわれも参加しましたが、全国的には分裂してしまった後でも法学部の岩佐幹三さんが被爆者だったこともあり大学人が運動にかかわることで石川県ではかなり持ちこたえることができました。それが完全にわかれてしまった後、三者懇という形で科学者と宗教者と被爆者で、これはもう本当に形だけですが、いざ何かという役割を果たしたんですね。

そういう良い雰囲気は金沢大学にはかなり強く残っていた、あるいは、生きつづけていたというか、そう思います。そのせいもあって、僕なんかも比較的住み心地がよくて、よそに出なかったということにもなるんだろうと思うんです。そういう意味で、若い先生方も労働者だとか、あるいは市民の運動に対して、社共だとか民社党だとかという、党派を超えた形で何らかの連帯を必要とするんじや

ないか、あるいはそういう連帯できるキャリアをもった先生方がここにたくさんいらっしゃるんじゃないかという気がします。

橋本 今のお話の中に出ていた内灘問題ですが、これは先生と大阪市立大学の宮本憲一先生・法学部の鈴木寛先生の3人で論文を共同執筆されて『思想』(358号 1954年4月)に発表されています。進藤先生は内灘にかかわることでどういうことを吸収されたのか、もうちょっと具体的にお話いただけますか。

進藤 僕はやっぱり出身が百姓だから、農民のことは随分知っているつもりだったんですよ。やはり、受けた教育がどっちかというところから切り離された教育だったし、僕が兵隊へ行って初めて労働者というのに直接、僕の部下にきたものですから、旋盤工でしたが、それと農民の違いというのはなんとなくにわかっていた段階で内灘問題が起こった。当時北鉄の内山光雄さんとか、労働組合の中でも反幹部闘争というのを出して来るし、家族ぐるみの闘争というふうな形で出ているし、学生も内灘に対して反基地闘争という形で加わって、農民は農民としてムシロ旗を立てると、そういうナマの運動を見たのはあのときに僕は初めてですね。兵隊の中でピラをまいている人たち、反戦のピラをまいている人たちがいたことは知っていますけれども、兵隊に行く前に東大文学部の西洋史教室に入ったら、あと2カ月しかない演習に出たんです。そのときアトランティックチャーターを英語で読んだんです。穂積重行さんがチューターでね。あれがあったおかげで僕は

生きて帰ろうという気になったのです。日本の戦争はおかしいということも充分気が付いてはいたけれども、しかし、どうしていいかはわからなかった。それが、内灘闘争という形で見たときに、ナマに民衆が動く動きというのを見て、我々とやっぱり違うという面と、同じという面とが交錯した形で出てきて、それから、そのときの付き合いで労働者や、県評の人びととか、そのほかの人たちとも付き合いようになっていった。それから後は何かズルズルという感じです。

水谷 私は詳しいことをあまり知らないんですが、まさに内灘闘争というのは、戦後日本の再建に直接かかわってくるという問題の枠組みを持っていたわけですね。いわば、超近代的なもの、遅れた近代というものが出会ったという意味で。その場合に、歴史家としてそういう現場に立ち合われた、そういう感想なり、インプレッションをぜひ伺っておきたいんです。

進藤 歴史家としてというか、僕もそう思っていたんですけども、例えば農村部なんかですと、進んだところが早く商品化するというふう々に思っていたんですけど、単純に。例えば、いってみれば加賀平野みたいに農業の生産性の高いところが。ところが、実際は違うんですね。内灘なんかみていると、共同体は残っているけれども、沿岸漁業とか浜辺の漁業とかという形で、地曳きで引いた、あるいは上がってきた魚を金沢に売りに行かなくちゃいけないという。いち早く、金沢とか野々市なんかよりも早く商品生産者になって

いるわけですね。同じようなことは、手取川の溪谷でも言えるわけですね。炭焼きからそういうふうに商品として金沢やなんかに売りに行く。そういうことを見ると、短格かもしれないんですけども、スイスならスイスでいち早く13世紀の終わりにはもう出てくる。普通の説明ですと、そこは東西南北の交通路・交易路だったからという。それだけで済まない。それが今もプロト工業化は農村工業とかというふうに変に屈折して出てはきますけれども、僕らが、現実に生産性が進んでいるから商品生産者というふうには単純には思えなくなったのは、やはり内灘を見てからです。僕の田舎は山形の周辺で、商品化もかなり進んでいるところだったんですけども、それよりははるかにこちらの方が古いものを残しながら、もっと商品生産にはかかわっていたという実態、それがそこで実態調査を僕がしたわけではなくて見ただけでもそれを感じた。殊に労働力が出ている。ああいったところに労働市場の問題も、北洋漁業に行くばかりではないのですネ。

林 内灘問題について『ドイツ近代成立史』にちょっと書かれていますね。「内灘の実態調査に加わった。共同体意識の強い村、おくれた生産関係」にもかかわらずということを書かれています。これを読みながら、例えば先生の、グーツヘルシャフトが、封建的な外皮を非常に強くもっているように見えるけれども、にもかかわらず、そこに歴史的発展を見出そうとする視点とつながっているようにも感じました。あのへんは先生のご研究



に影響というようなところはあったんですか。進藤 ありますね。実際直接やったのは宮本憲一さんとか学生が調査して、確かに内灘というのは非常に古いものを持っているんですね。村の共同体の指導者が、この前亡くなった当時内灘村長の中山さんとか、出島権二さんたちが指導権を握っているときには抵抗の組織にはなるけれども、村のボスが一度抑えられてしまうと、今度は権力の末端機構になっていくという、そういう実態、同じ共同体がそういうふうには歴史の中で変わるといことは、実感としてあのときわかったんですけども。

その後、大学紛争で学生にいじめられたときがあるんですが、教官なんというのは文部省の手先だというときに、やはりおなじ論理を僕は使って、大分山辺さんとも議論したかもしれないんだけど、結局大学というのは、一方では学生だとか、少なくとも大学改革については対文部省への抵抗の組織にもなるけれども、反面予算や何かで縛られると、これは権力の末端へきて学生を弾圧しなくちゃいけないという、何とも言えないイヤな思いをしたんですね。殊に、セミの学生が民青で、史学科の西洋史の学生と親しくし

ていて、こちらは対立したセクトで、両方知っているのが殴りあいする。本当に何とも言えない嫌な思いをして、教師なんて止めようかなとつくづく思ったこともあります。

橋本 チェコから帰られた直後(1972年)に、あれよあれよという間に法文学部長になられて、それでまさに権力の末端よりももうちょっと高い位置に立たれたわけですね。私もそばで学部長ぶりを拝見していたんですけども、山辺さんはこのメンバーの中では一番付き合いが長いので、山辺さんがみられた進藤学部長像みたいなものを一言。

山辺 僕たちが助手問題で対立したのは進藤先生ではなくて、その前の増井経夫学部長とでした。しかし、その後も大体増井先生の支配パターンがしばらく続きましたね。

進藤 僕がなったのは、年取った教授方はまだ学生紛争が続くと思っていたんで、学部長は若いやつに押し付けるといふ形です。だから、僕が教授になったのは、学生紛争が始まってからです。他学科から教務委員長が出なくなったので経済学科から出せというときに、わざわざ僕を教授にして教務委員長をさせたのだと思っています。そのとき外国留学へ行くことは決まっておったんですが。

山辺 当時は教官層の中で、古い先生方と、さっき先生が言われた現状分析の会なんかに集まっておられた若手の先生方との対立があって、そこへ我々助手とか、あるいは学生とかが絡んできて、それでいつの間にか四つともえぐらひの感じになったんですね。教官層について言えば、既成の対立意識が強すぎて、

新しく出てきた学生とか助手とかの真意を理解できず、勝手に自分達の既成の対立の構図で理解せざるを得なくなり、その結果議論が出来なくなったのだと思います。ですから、どうしても対立は相当きつところまでいった時期もあったんですね。お互いの焦点がちよつとずれながら対立が続いたものですから、真正面で解決がバンといかないで、何かずれた形でいつまでも続くという感じはあったと思いますね。

橋本 藤田さんは経済学部になってからですが学部長という管理職を経験されましたが、その立場から進藤像はどうですか。

藤田 もう時間もあんまりないのでここでぜひお伺いしたいのは、先生の金沢大学在職中の終わりの10年ぐらひは新制学部なんですね。経済学部になって、それ自体どう思われるかということもありますが、経済学部がこれからどうあるべきかということでご意見を伺いたいですね。あるいは蓄積の豊富な進藤先生から見れば、若い我々が、私も若いつもりですけれども、古くからいる方も、あるいは新しい方も含めて、もっとどうあるべきだというようなことが大先輩としてあるんじゃないかと思うんですけども、この際、少し厳しいところをお聞きしたいと思っております。

進藤 基本的には、山村勝郎先生等とも話合せて、これからの経済学部を主体的に担っていらっしゃるのは若い世代なんだから、口はださないというのを大体基本線にしてきたと思いますよ。時々チャチャも入れましたけれども。それだけ、皆さん方に甘えていたと

いう面もあるんですが、ただ、やはり、運営なんかを見ていて感ずるのは、無意識の内にやはり学生に対して管理するというか、締め付けるといふか、そう締め付けてもいないと思うんですけども、学生に対して世間の管理体制というのが何となしにじわじわと目に見えない形で入ってきているんじゃないかという。しかし一方では、例えばカリキュラムを自由にするとかという形はとりながらも、何となしに学生を締め付けているというか、管理の対象にしているというような気がしないでもないんです、正直に言って。もう少しやはり学生には自由にやる、もちろん自由にしたって彼らは勉強するとは限らないと思えますけれども、そういう面がある。特に、大学院というのは、僕らのときの大学院というのは古い時代ですから、30単位なんて取ろうという、そういうのがない時代ですから、大学院に対する対応自体にもやっぱり管理意識というか、カリキュラムの上で、あるいは制度的に出ている、そういう点が、逆に言うと先生方の学問の展開の芽を摘んでしまっているんじゃないか。こんなことを言うと、レトロになり過ぎますけれども、我々の先生というのは35歳ぐらいで一応一人前みたいな顔をしていたわけですね。そういうことと、大学院ができてからは、どうしても少し時間的に遅れてくるようになった。そうすると、学部全体が、全体として年を取り、やはり若い血が抜けてくる。じゃそれは学生がやってくれるかという、やっぱりなかなかちゃんとした大学院がないせいもあって、つながらない

ですね。そういうことを感じますね。やっぱり、殊に入学試験の制度だとか、ああいう形で変な形に締め付けがきて、それに対応せざるを得ないというやむを得ない面もありますけれどもね。しかし、ここの経済なんというのは、本当に僕ら最初に赴任したときには英語だとか、ドイツ語だとかいってもしゃべるのは一人もいなかったというのに、これだけ皆さんが、我々よりははるかにそういう点では進んでいるので、将来は大いに期待しております。

橋本 今のご発言の中に、教育者進藤の一面みたいなもののがはっきり出ていたと思います。先生は、大学の中だけではなく、外でも、例えば労働者教育にもずっと長くかかわって活動してこられたわけですが、それを脳で見えていまして、教育というのは、進藤先生のように教え子に対するやさしさみたいなものがないと駄目ではないかなと思ったことがあります。そのようなことを、今の音楽を通じて再び強く感じました。進藤先生にはまだまだお話ししていただきたいことが沢山あります。学生時代・軍隊時代のお話しが聞けませんでしたし、これからの研究についての抱負、あるいはまた教え子の思い出、さらにお酒の話が出ないのはものたらないですが、これは目の前にいまお酒が用意されていないからでしょう。時間もまいりましたので、この辺で座談会を一応おわらせていただきます。きょうはどうもありがとうございました。